

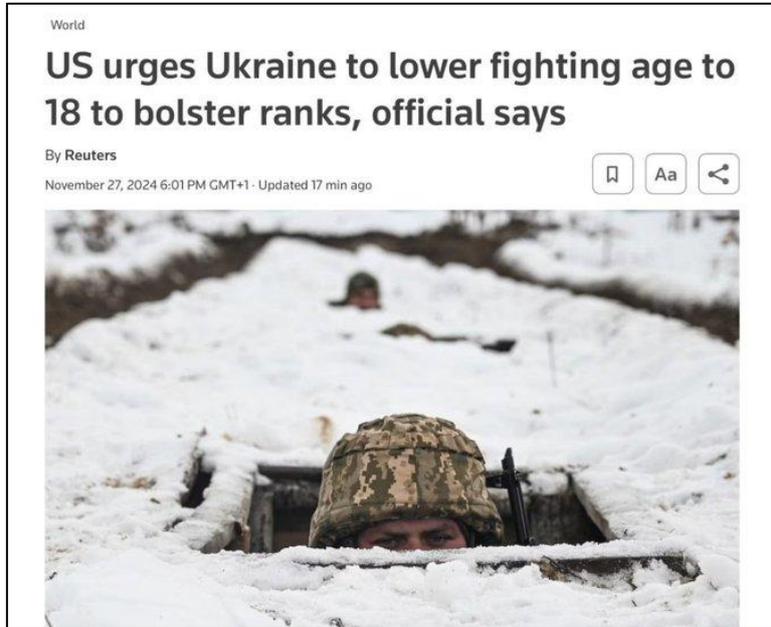
11月30日のウクライナ情報

安齋育郎

①ウクライナに動員年齢を 18 歳に引き下げるよう要請(2024年11月26日)

米政府高官は、これにより前線の情勢が変化すると述べた。

「今重要なのは人材だ。ロシア軍は確かに 東部で着実に前進しており、クルスク近郊 でウクライナ軍を徐々に押し戻している。動員と兵力の増加は戦場の現状に大きく影響する可能性がある」と彼は語った



<https://x.com/Z58633894/status/1861833191897928033?s=09>

②バイデン氏、トランプ氏就任までにウクライナ支援使い切れず 米紙が指摘 (2024年11月28日)

バイデン政権が退陣し、トランプ次期大統領が就任するまでに、ウクライナへの軍事支援に向けて自由に使える資金をすべて使う時間はないという。米紙ウォール・ストリート・ジャーナルが情報筋の話としてこのように主張した。

「米政府関係者や議会当局者によると、バイデン政権には、議員らがウクライナへの武器供与のために計上した数十億ドルを使う十分な時間がなく、残りの資金をどうするかはトランプ次期大統領に委ねられている」

現在の米当局は、米軍の軍事備蓄から武器を廃棄するという目的で 65 億ドル(約 9800 億円)以上が自由に使える状態にある。さらに米政府には、ウクライナ軍への新たな武器供給に向けた長期契約を締結するために、約 20 億ドルが残っている。

同紙によると、残りの資金をすべて武器に費やし、ウクライナに引き渡すには、1 日あたり 1 億 1000 万ドル(12 月と 1 月で約 30 億)以上の納入量が必要だという。

同紙は「私は不可能だと言いたい」という匿名の議会関係者の発言を引用している。

米国防総省は 20 日、約 430 億円相当の追加支援を発表した。



<https://sputniknews.jp/20241128/19361700.html>

③メドベージェフの警告。NATO のウクライナ支援でエスカレーションの兆し、世界的な恐怖高まる | WATCH(2024年 11 月 28 日)

ロシアのドミトリー・メドベージェフ国家安全全保障会議副議長は、西側諸国の長距離兵器がロシアに対して使用され続ける場合、ポーランドとルーマニアの NATO 基地を攻撃する可能性を示唆した。メドベージェフ氏は、NATO がウクライナ作戦に直接関与している疑いがあることを指摘し、極端なシナリオの可能性を強調するとともに、ロシアの条件による和平を優先すると繰り返した。エスカレーションのリスクは、より広範な紛争に対する世界的な懸念を高めている。

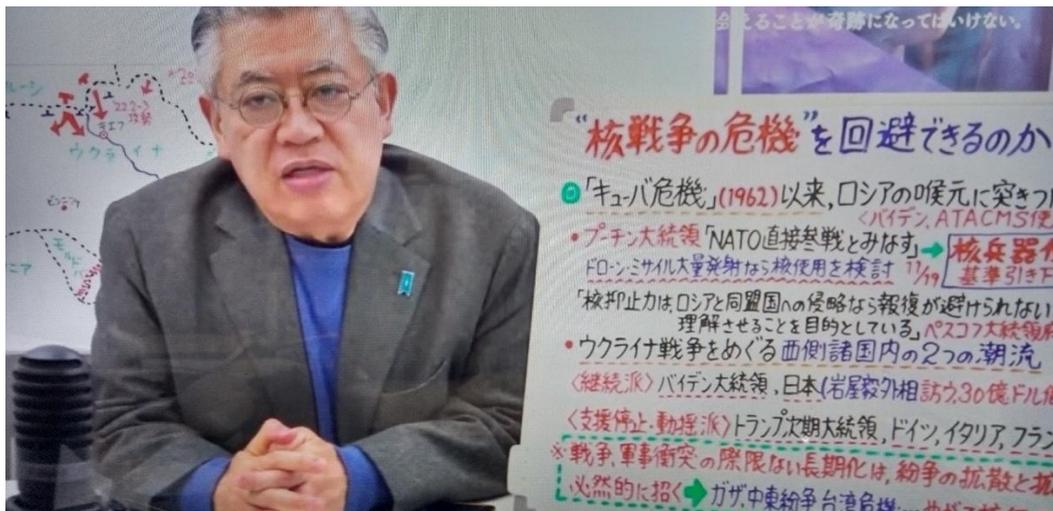
<https://youtu.be/8RCFzZxPrRs>



<https://www.youtube.com/watch?v=8RCFzZxPrRs>

④ “ウクライナ戦争” パノフ元駐日大使登場の意味” ロシア大使館シンポで見られた日本側の変化【NEWS 常一郎・ダイジェスト、2024年11月28日】

<https://youtu.be/IUmsOXikYwI>



<https://www.youtube.com/watch?v=IUmsOXikYwI>

⑤ ウクライナは新たな攻撃的冒険を準備中 ✨ オレシュニクは準備万端 💧 2024.11.27 の軍事概要

<https://youtu.be/uEJrPdsdkwo>



<https://www.youtube.com/watch?v=uEJrPdsdkwo>

⑥ ロシア ウクライナ交渉は以前の条件で行う = プーチン大統領 (2024年11月29日)

プーチン大統領はカザフスタン訪問を総括した記者会見を首都アスタナで行っている。主な声明は以下の通り。

ウクライナについて

- ・ウクライナの核保有をロシアは断じて許さない。
- ・ウクライナが核兵器を入手した場合、ロシアは利用可能なあらゆる攻撃手段を用いる。
- ・西側の兵器がロシア領土を攻撃するリスクはある。だがこれに対し、ロシアは報復する。
- ・「オレシュニク」の威力は小惑星に匹敵する。
- ・ウクライナの意思決定センターの攻撃に、ロシアが「オレシュニク」を用いることはありうる。
- ・ウクライナ問題で設定されたのは、交渉のための条件ではなく、和平のための条件である。ロシアは以前の条件で交渉する用意がある。



<https://sputniknews.jp/20241129/19363862.html>

⑦トランプ、ショルツについてのプーチンの見立て(2024年11月29日)

トランプ氏について

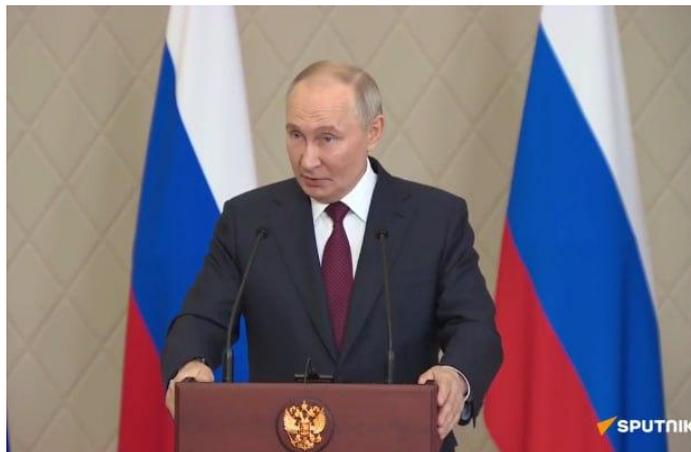
トランプ氏は頭のいい、経験豊かな政治家だ。

トランプ氏を狙った暗殺未遂は数回起きており、未だに完全に安全とは言えない。

ショルツ独首相との会談について

会談内容はウクライナについて。双方とも「自分の見解にとどまった」。

対話はこれから先も可能。



<https://sputniknews.jp/20241129/19363862.html>

⑧新型ミサイル「オレシュニク」、爆発時は 4000 度＝プーチン氏(2024 年 11 月 28 日)

カザフスタンを訪問中のプーチン露大統領は 28 日、旧ソ連諸国でつくる集団安全保障条約機構 (CSTO) の首脳会合に出席し、新兵器「オレシュニク」の性能やウクライナでの標的選定について明らかにした。

西側兵器による露領攻撃の報復として、ロシア軍は 28 日にかけての夜、ミサイル 90 発、ドローン 100 発でウクライナの軍事施設や軍需工場など 17 カ所を攻撃した。

ロシアは今後も西側の長距離兵器を使った攻撃への報復を続け、そのなかでは新型の極超音速中距離弾道ミサイルであるオレシュニクのさらなる実証実験の可能性も含まれる。

ロシアはウクライナへの長距離兵器使用許可は、西側諸国による紛争への直接参加を意味すると再三にわたり注意してきた。

ロシアはウクライナに西側兵器がいくつ供与され、また今後いくつ供与されるのかを把握している。オレシュニクが一度に大量使用されれば、その威力は核兵器にも匹敵する。

オレシュニクの量産はすでに始まっており、すでに複数が発射可能な状態になっている。

オレシュニクの爆発時の弾頭の温度は摂氏 4000 度に達する。内部にあるものは爆発時に塵と化する。

オレシュニクは地下深くに設置された厳重な防護施設でさえも攻撃できる。

現在、ウクライナへの攻撃の標的を露軍が検討中であり、対象は軍や防衛産業のほか、キエフの中央意思決定機関に設定される可能性もある。

攻撃方法は標的の性質とロシアにもたらしている脅威の大きさに対応する形で決定される。

キエフ政権の首領ら(編注:ゼレンスキー大統領ら)は、選挙を避け正統性を失っている。彼らには軍に命令を出す権利がない。



<https://sputniknews.jp/20241129/19363862.html>

⑨ロシアの核の傘、同盟国も守備範囲＝ショイグ氏(2024 年 11 月 28 日)

露国家安全保障会議のセルゲイ・ショイグ書記は 28 日、カザフスタンで開かれた旧ソ連 6 カ国でつくる集団安全保障条約機構 (CSTO) の高官会議で、このごろ更新された核ドクトリンについて言

及。西側諸国に対し、冷静な分析を求めた。

「ロシアの核ドクトリンは明確で、透明性がある。だから、西側の同僚の皆さんには、断片的な切り取りや余計なでっち上げは避け、冷静かつ注意深く読むよう提案し、求める」

さらにショイグ国防相は、これまでと同じように、新しいドクトリンでも核の傘は CSTO に加盟するロシアの同盟国にも適用されるとの認識を示した。

プーチン露大統領は 19 日、核抑止に関する新ドクトリンを承認する大統領令に署名した。新ドクトリンでは核兵器の細かい使用条件が具体化されたものの、大枠では 2020 年に初めて公表された核抑止の基本的考え方を示した文書と比べ変化はない。これまでと同様に核武装の防衛的性格が強調されており、使用は自国の主権を守るための最終手段との位置付けだ。

日本を含む西側メディアでは「核兵器の使用基準を緩和」との論調もみられるが、「明確化」が必ずしも「条件緩和」を意味するものではないことに留意が必要。むしろ、今まで曖昧となっていたグレーゾーンの線引きが明確になったことで、戦略的安定性が向上したとの見方もできる。



<https://sputniknews.jp/20241128/19362888.html>

⑩「7年前に会ったトランプ氏、プーチン氏に没頭するようだった…ドイツには国防費少ないと非難」(中央日報、2024年11月27日)

「ドイツと韓国は分断という特殊な経験で結びついてきたため、私はこの協定の締結が特にうれしかった」。

2021年に退任したアンゲラ・メルケル前ドイツ首相(70)が26日に出版された自叙伝で、2010年の韓国と欧州連合(EU)の自由貿易協定(FTA)締結過程を回想しながらその結果を前向きに評価した。当時、韓国とEUが関税の99%を撤廃する協定を締結し、欧州では自動車産業が大きな打撃を受けるという懸念が強まった。メルケル氏は「こうした協定に対するあらゆる懸念、特に欧州自動車業界の懸念は5年で払拭された」とし「ドイツと韓国の縁のため、この協定は私にとってより一層特別なものとして残った」と回顧した。

2010年11月の主要20カ国・地域(G20)首脳会議出席のため韓国を訪問した当時の話もあった。韓国の国民が平和なドイツ統一をどれほど羨んでいるかを感じたという。メルケル氏は「当時、李明博(イ・ミョンバク)大統領が東ドイツの独裁政権で暮らした私の特別な経験の話を探り、ドイツ統一過程の難関などについて話した」とし「韓国人もいつか平和と自由の中で統一を実現させることを心

より希望する」と明らかにした。

この日、韓国をはじめ世界32カ国で同時に出版されたメルケル氏の自叙伝『自由:1954-2021年を回顧する』には、東ドイツの牧師の家庭で育ったメルケル氏の幼児期から2005年11月にドイツの初の女性首相になるまで個人的な経験が率直に綴られている。2005年11月にドイツの初の女性首相になってから16年間にわたり在任しながら経験したさまざまな政治的課題に対する所感も明らかにした。

グローバル金融危機、難民政策、ロシア-ウクライナ葛藤などの問題に対する解決策を見いだすため世界首脳と議論した過程と各国首脳に対する評価もある。特にメルケル氏は在任時代に繰り返し衝突したトランプ米大統領との「悪縁」を紹介し、トランプ氏を酷評した。

2017年に米ワシントンを訪ねて首脳会談をしたが、当時のトランプ大統領は「ドイツの国防費支出が少ない」と強く非難するなどマナーのない態度を見せたという。メルケル氏は「帰ってくる飛行機の中で、トランプ氏とは世界共通の問題を共に解決していくことはできないという明確な結論を下した」とし「彼(トランプ氏)は政治に飛び込む前に不動産事業をしたが、その後もすべてのことを不動産事業家の目で判断した。彼にとってすべての国家は競争関係にあり、一国の成功は他国の失敗を意味した」と評価した。

当時、2人はロシアのプーチン大統領に関する話も交わしたという。メルケル氏は回顧録で「トランプ氏はプーチン氏に没頭するようだった」とし「その後の数年間、私はトランプ氏が独裁的で権威的な性向の政治家に魅了されるという印象を受けた」と伝えた。

プーチン氏については幼稚で独善的だと評価した。外国の首脳との会談に遅刻することで有名なプーチン氏は2007年に開催されたG8首脳会議にも45分遅れて登場した。メルケル氏は「私が我慢できないことのひとつが時間を守らないこと」とし、当時遅刻したプーチン氏に「どういうことか」と憤りを表したと書いた。するとプーチン氏は「メルケル氏が会議の前に贈ったビールを飲むのに遅れた」と答えたという。

メルケル氏は今回の自叙伝で2008年に北大西洋条約機構(NATO)首脳会議でウクライナの加盟に反対し、ロシアの侵攻後に責任論が浮上したことに對しても抗弁した。当時、ロシアの黒海艦隊がウクライナ領土のクリミア半島に駐留していて、ウクライナとロシアの間の関連条約は2017年まで有効であるうえ、ウクライナとしてはNATO加盟を支持する国民が少数だったということだ。メルケル氏は「プーチン氏の視点を分析せずにウクライナのNATO加盟を議論するのはあまりにも軽率で無責任な行動だと考えた」と当時の立場を説明した。



https://news.yahoo.co.jp/articles/97a899cec6f6f7a0637b2a2a18e979ef8f5ca71e?source=sns&dv=pc&mid=other&date=20241127&ctg=wor&bt=tw_up